

日本環境法律家連盟年次総会での河野昭一京大名誉教授の講演内容

2007年10月5日 かでの2・7

河野氏は北海道室蘭生まれ（室蘭栄高校出身）、北大“植生科学”の大家、農学部旧農業生物学科応用植物学教室の故館脇操先生の1番弟子とも言われる方。カナダ・モントリオール大学でPhD.取得。富山大学教養部教授から京都大学理学部植物額教室教授・同名誉教授。北大旧教養部学生時代から学術論文を出されていた。

三省堂新書「種と進化」は衝撃的な読み物。

テーマ「森林からみた世界と日本列島の現状と緊急性」・・・石井メモ

1) 世界の温帯林はアメリカ東部、日本を含む北東アジア、ヨーロッパにしかない。属レベルとみると、日本とアメリカ東部には共通種が多い。ショウジョウバカマ、フッキソウ、イワナシ、ミズバショウ等。潜在植生と現存植生を比べると、我が国の植生は人間の開発によって自然植生は亜高山帯を除くと、非常に少ない。

日本にしかない固有種として、ブナ、イヌブナ、カツラ、センノキ、スギ、ヒノキアスナロ、などがある。ここに天然林を保護する意味がある。

2) ブナは冷温帯の代表樹種であり、他家受粉をする。我が国にはブナとイヌブナがある。アメリカ、ヨーロッパ、中国にはブナの天然林が残っていない。中国には7種類のブナがあるが、ベトナムに天然林がわずかに残っているに過ぎない。朝鮮にはブナはない。

我が国では氷河期において南に移動して残存。約10000年かかって東北まで北上。渡島半島には700年から900年前に到達したと推定されている。氷河期にも津軽海峡は海であったので、氷河期において、谷筋に避難して残りえたのではないかと思う。奥尻のブナも同じである。

日本のブナは天然林が残っているという点で世界的にも貴重であり、このことが世界の学者によっても認められている。

3) ブナの更新様式をみると、母樹から10mから30mの距離が拡散の範囲である。これ以上、母樹間を離すと、次世代の更新に不安がある。ギャップパッチ内での更新が行われている。林分の分断が進むと、更新 定着確立が減り、ブナの絶滅という事態が生じる。こうしたブナの更新特性を考慮しない大規模な皆伐が行われると、世界的に貴重であるブナの撲滅に伐採が手を貸すこととなる。

4) 現在、世界的に

- ・酸性降水物の増加による枯死の拡大
- ・病虫害の発生
- ・大規模伐採による被害、という問題に直面している。

特に改めて酸性降水物（酸性沈着）の増加による死の拡大に注目すべきであ

る。丹沢ではブナの枯死が進んでおり、立山でも進んでいる。大台ヶ原ではトウヒが枯死している。酸性降水物の増加すると、タンニンが合成されなくなって、シカの食害が増え、またキノコが増える傾向がある。複合要素によって被害がでて、初めは緩慢な衰弱であるが、それが枯死に至るということである。

5) 日本の天然林の現状

- ・下北半島ではブナ、ヒバを皆伐している。皆伐で土壌層を攪乱している。
- ・秋田スギ。かつて尾根筋に残されていた保護樹帯を今、伐採している。盗伐も絶えない。
- ・木曾ヒノキ、群状択伐ということで伐採している
- ・梁瀬スギ、集中的に伐られている。

6) 北海道にて、阿寒、大雪山の現状をみた。国立公園内で、なおかつ保安林に指定されているところで、**風倒木処理**という名目で20ha以上の伐採が行われている。このことは異常なことである。

統計によれば、かつて我が国には950万haの天然林があったとされていた。現在はそれがわずかに278万haに減少しており、我が国の森林面積の11%にしかないというのが現状である。

7) 当面何をすべきか。

貴重な天然林を保護することは当然であるが、森林に関わって中長期な経営プランを樹立する必要がある。木材生産に関わっては人工林の除間伐を徹底的に行うことが必要である。